

「こんびたろう」

むかし、あるところに、**うまれてからいちどもお風呂にはいったことのない**、じいさんとばあさんがいました。この夫婦には、子どもがいなかったので、あるとき、

「ふたりの体から、こんび（あか）をとって、それをこねあわせて人のかたちをつくってみよう」という話になりました。

あかをおとすと、でること、でること。ふたりはそれをこねて、人のかたちをこしらえ、ごはんを食べさせました。すると、一杯食べれば一杯ぶん大きくなり、二杯食べれば二杯ぶん大きくなりました。じいさんとばあさんはよろこんで、「こんび太郎」と名前をつけました。

こんび太郎は、食べさせれば食べさせるほど、大きくなりました。そして、どんどん大めし食らいになり、**とうとう馬の片荷ぶん、三斗五升の片馬めしをいちどにたいらげるようになり**ました。

『日本の昔話1』小澤俊夫再話／福音館書店

風呂に入らないとなると、生まれてからいちども入ったことがないので。あかの量は人形が作れるほどたくさんです。片馬めしを食べるほどの大食いです。極端ですね。

「天までとどいた木」

あるとき、村のまんなかに、とつぜん、木が一本はえてきました。それは、**これまでだれも見たことがなく、本にもものついでないような木**でした。

木は、ずんずんのびていきました。**二、三日すると、教会の塔よりも高くなり、二、三週間たつと、もう木のでっぺんは雲の中に見えなくなってしまう**ました。

語りの森ホームページ《外国の昔話》

ドイツの昔話。珍しいとなると、だれも見たことがなく、本にも載っていません。極端です。また、木の成長のスピードも極端に速いです。

「まほうの鏡」

その国のおひめさまは、**何でも見えるまほうの鏡**を持っていました。おひめさまは、国じゅうに、こんなおふれを出していました。

「わたしの目の前からすがたを消して、三日たつても私に見つけられない人と結婚します。もし、かくれているのが見つかったら、その人は打ち首です」

これまでたくさんの若者が挑戦しましたが、みな失敗しておひめさまに見つかり、打ち首にされました。**おひめさまはその首で高い塔を建てさせました。**

語りの森ホームページ《外国の昔話》

ギリシヤの昔話です。何でも見える、これは極端を通り越して「完全性」があらわれているところ。塔を建てられるほどだくさんの首。まずおふれ自体が極端ですね。

「ガラス山のおひめさま」

さて、アシェラツドのすんでいた国の王さまには、おひめさまがひとりありました。王さまは、このおひめさまを、**ガラスの山**に、馬でのぼれたものでなければ、結婚させない、と言うのでした。王さまのお城のちかくには、ガラスでできた、たかいたかい山があり、**そのガラスは、まるで氷のようにつるつるでした。**そのてっぺんに、おひめさまが、ひぎの上に、**金のリンゴ**を三つもって、すわり、馬でそこまでのぼって行って、三つの金のリンゴをもつてかえることのできたものが、国のはんぶんをもらい、おひめさまと結婚できることになったのです。王さまは、このことを、国じゅうの教会の戸ぐちに、書いてはりつけました。それから、たくさんのよその国ぐにも、このことをしらせました。

おひめさまは、**とても美しかったので、ひと目でもみたものはだれでも、たちまちすきなうってしまうほどでした。**ですから、おひめさまのことを、すこしでもきいてしっている王子さまや、騎士たちが、おひめさまと、国のはんぶんをもらおうとして、どんなにねっしんになったか、おわかりのことでしょう。そして、大きな、元気のいい馬にのり、いちばんりっぱな服をきこんで、世界じゅうから、みんな、われもわれもとあつまってきたことも、おわかりでしょう。だれもかれも、めいめい、じぶんこそ山にのぼって、おひめさまをはなよめにするのだ、と決心をかためていたからです。

いよいよ、王さまのきめた腕くらべの日になると、**ガラス山**のふもとには、王子さまや、騎士たちが、クモのようにあつまりました。みんなをみようとする、くびをくるつとまわさなければならぬほどでした。**国じゅうの人たちは、少しでも足腰のたつ人なら、のこらず山のほうへとでかけました。**だれもかれも、ぜひ、競争に勝って、おひめさまのおむこさんになる人を、みたいと思っただからです。

『太陽の東 月の西』アスビョルンセン／岩波少年文庫

長い引用ですが、読んでみてください。とくに黄色掛けの部分、極端性があらわれているところです。また、「ガラスの山」は固いもの、「金のリンゴ」は金や銀を好む例です。